

# 有害鳥獣捕獲における錯誤捕獲防止の取り組み

群馬森林管理署

黒田 隆

## 1 課題を取り上げた背景

群馬森林管理署管内でも、ニホンジカ（以下「シカ」）による被害面積の拡大から、防除柵や忌避剤等の被害対策とともに、職員による直営捕獲や業務委託での捕獲（許可捕獲）を進めています。

くくりわなによる捕獲は、小林式誘引捕獲によることとしていますが、捕獲対象のシカ以外の獣類、特にツキノワグマ（以下「クマ」）も誘引し錯誤捕獲してしまうというリスクがあります（令和5年度、直営1頭、委託3頭の錯誤捕獲）。

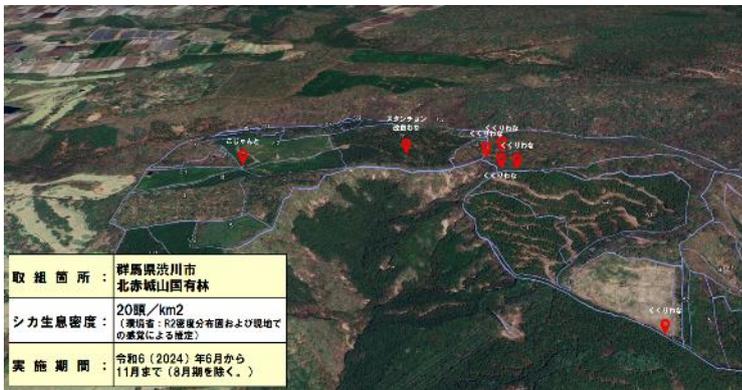
捕獲したクマへの対処では、暴れることで危害を受ける可能性があると同時に、行政上の捕獲許可がないため、許可者（市町村長）による処置の判断を待ち、関連する手続きからも業務上多大な負担が生じます。

これらのことから、錯誤捕獲を極力回避しシカのみを捕獲する技術の実用化が望まれています。



（写真）直営捕獲で錯誤捕獲されたクマ

## 2 具体的な取組



（図1）取組条件とわなの配置

この取組では、4種類の誘引資材と4種類のわな資材（表1）を組み合わせ、錯誤捕獲を防止する観点から効果的な方法を追求するため、センサーカメラで誘引と捕獲の状況を撮影しました。

取組条件とわなの配置は、（図1）のとおりです。

なお、群馬署における直営捕獲は、従事者（職員）の業務負担を最小限にとどめるため、1泊2日（1日目：わなの仕掛け、2日目：見回り・捕獲処理・わな回収）を1サイクルとして、隔週で実施しています。

（表1）誘引資材・わな資材一覧

誘引資材	わな資材
ハイキューブ	オリモ式
	オール塩ビ
鉢 塩	空はじき知らず
	小林開発
ユクル	ベアウオーク
	いのしか御用
鉄	こじゃんと
	セルフロックスタンション

※くくりわな(改良わな含む)については、小林式誘引捕獲によりハイキューブで誘引。



（写真）ユクルに誘引されるシカ

### 3 取組の結果

センサーカメラで撮影されたシカ個体のうち誘引資材を採餌するシカの撮影頻度は 62% (表 2) でした。また、撮影された状況等による各種誘引資材の評価については (表 3) のとおりです。

誘引資材	ハイキューブ	鉍塩	ユクル	鉄
撮影頻度	30%	13%	19%	0%

ハイキューブ	秋季～冬季について選択性あり。
鉍塩	降雪期以外は選択性あり。クマ誘引あり。
ユクル	シカ誘引はされるが選択性は低い。
鉄	撮影されず。判断不能。

わな資材		設置基数	捕獲頭数	捕獲割合	資材別効率
くくりわな	オリモ式	40	6	55%	1%
	オール塩ビ	7	1	9%	1%
	空はじき知らず	1	0	0%	0%
	小林開発	3	1	9%	3%
改良型わな	ベアウオーク	2	0	0%	0%
	いのしか御用	2	0	0%	0%
囲いわな	こじゃんと	1	2	18%	17%
首用わな	スタンション	4	1	9%	2%
合計		60	11		
捕獲効率=捕獲頭数/(わな設置基数×捕獲夜数)×100 =11頭/(60基×12夜)×100 =1.53%					

一般的なくくりわなの捕獲効率 (1%以下) と比較しても、実施期間全体での捕獲効率は 1.53% (表 4) となりました。この結果については、シカの母子グループの通り道で誘引した一定の成果と捉えています。

### 4 まとめ

撮影されたシカの誘引画像及びわな資材の構造と誘引資材に対する嗜好性から、錯誤捕獲防止に有効な資材の組み合わせを考察し、撮影された割合 (◎ : 7 割以上、○ : 4 割～6 割、△ : 3 割以下) に応じて整理しました (表 5)。

わな資材	ハイキューブ		鉍塩		ユクル		鉄	
	シカ	クマ	シカ	クマ	シカ	クマ	シカ	クマ
くくりわな	○	×	○	○	○	×	—	—
改良型	○	—	△	—	△	—	—	—
囲いわな	◎	—	◎	—	◎	—	—	—
首用わな	◎	—	◎	—	◎	—	—	—

(1) クマの錯誤捕獲を考慮した場合のベストミックスは、

「囲いわな×ハイキューブ」

\* 上部からクマが脱出するわな構造と誘引資材のクマ嗜好性の低さ

(2) シカのメス個体を選択的に捕獲することを考慮する場合には、

「首用わな×鉍塩」

\* オスは角が邪魔して掛からないわな構造と誘引資材のシカ嗜好性の高さ

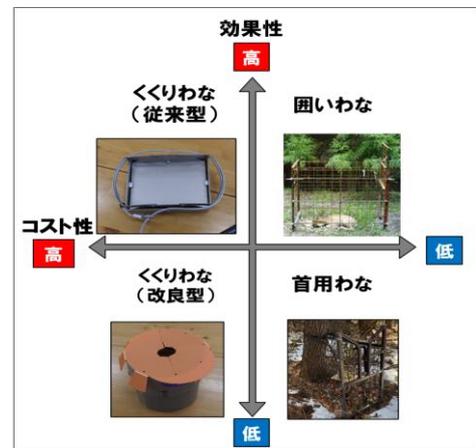
ただし、(表 5) からは、クマの錯誤捕獲を抑止する効果は不明でした。

このことを踏まえると、時間の制約を受け、日常業務におけるシカ捕獲では、「シカのみを誘引し捕獲する効果性を高める」ことが、効率的な錯誤捕獲防止になり得るものと考えます。

このためには、シカを効率的に誘引する「効果性」と、業務としての有害獣類捕獲対策にかけられる「コスト性」を考慮することが重要です。

今後における効率的なシカ捕獲業務に向け、特に優先度をつけ重点化して実施していく必要があるため、(図2)を整理しました。

今後の錯誤捕獲対策を兼ねたシカ捕獲においては、以下の優先度により進めることとします。



(図2) 4象限マトリクス

- ① くくりわな (効果性・高×コスト性・高) … 効果を実証したことからも継続して実施  
(取組方向：本結果を基にしたシカのみ誘引性の向上で実績向上)
- ② 改良型わな (効果性・低×コスト性・高) … 投資対象として重点化すべきわな  
(取組方向：シカのみ誘引に頼らずとも錯誤捕獲を回避するわな機能を拡充検討)
- ③ 囲いわな (効果性・高×コスト性・低) … 誘引資材との組合せで効果はあるがコスト面で劣後  
(取組方向：本結果を基にしたシカのみ誘引性の向上とわな設置場所の検討)
- ④ 首用わな (効果性・低×コスト性・低) … 捕獲機能とコスト面から最後列  
(取組方向：シカのみ誘引性の向上から継続的に観察)

今年度、職員による直営捕獲では錯誤捕獲はなかったものの、事業者への業務委託では2頭のクマの錯誤捕獲がありました。

委託する場合においても、本結果を基に、シカのみを誘引しコスト面での有利性を考慮した取組をフィードバックする必要があると考えています。

本結果に加えて、引き続きセンサーカメラで動物種の生息分布や行動特性を具体化して把握する必要性を感じています。

さらにICT機器の活用から、遠隔地における捕獲状況の視覚的な確認により従事者の見回り負担を改善するとともに、捕獲日数に応じた効率的なシカ捕獲(捕獲効率)から、森林資源の効果的な保全管理に資する取組を進めてまいります。